

優秀賞

「妖琦庵夜話 その探偵、人にあらず」

榎田 ユウリ (KADOKAWA)

健康栄養学科 矢田菜摘

この小説には、遺伝子の突然変異によって妖怪の DNA の一部を持つ「妖人」と呼ばれる人達があります。妖人の存在が世間に浸透する一方で、新聞やテレビは正確ではない妖人についての情報や、犯人が妖人である事件を大きく取り上げるようになります。また、元々あった妖怪のイメージが重なり、人々の中で「妖人は怖い」という意識が広まり、妖人を差別し始めます。そんな世の中で、ある女子大生が殺害され、その犯人が妖人と思われる事件が起きます。その事件を担当することになった警視庁妖人対策本部、略して「Y 対」の新人刑事が事件の相談をするために妖怪や妖人に詳しい主人公がいる妖琦庵を訪ねます。

まず、妖人という設定からファンタジーな世界観だと感じるかもしれませんが、基本的には現代の日本社会とほとんど変わらないので、身近に感じられる場面があります。例えば、妖人への差別意識は、生まれつき身体に障がいを持った人に対する差別意識に近いものを感じられます。物語を通して差別や偏見などの人が無意識うちに持つ闇を見ることで、改めて現代社会におけるあらゆる問題について考える機会になるのではないのでしょうか。

また、主人公は世の中の間違った認識や偏見をもつ人に対してとても厳しく、特に妖人への認識が間違っていれば、読み手も思わず納得する説明で正しい認識へ導きます。妖怪と妖人を混合しがちだった新人刑事も主人公に出会うことがきっかけに、刑事として急成長します。自分も人との出会いを大事にして、新人刑事のようにあらゆる面で成長できればと思います。また、主人公のように人に良い影響を与えられる人になれるように、幅広い知識やさまざまな経験を積み上げていくと同時に日々の生活を大切にすることを心がけたいです。

是非「妖琦庵夜話」を読んでみて下さい。物語の中にはあなたの心に残る何かがきっとあるはずです。